

いゝ手足で繰りながら聲をしたらんで行くところぬりぬり
で入口の所へ来た斯くの如く三回真闇な中を引き廻は
られた格子の外へ出て寮内者が此の戒壇は心字形の戒
壇と申して常寺の南山某法師の思考に依て作られたも
のであると言はれた是で拝覽する所もなほ今は別に用
事もなければ拝覧料十五錢を納めて帰途に就いた。

西谷御竹庵巻拜の記

中一因観孝

夕月既に西山に没して空は紺碧の色を増す群鳥遠く彼
方に鳴き出る頃我れは御竹庵の舊地に詣てむと飄然と
宿を出て坂を下り繁れる木間を走り細き畦道を辿り清
き流れの西谷川を渡りて遠に苔むす所基を望めば身は
いつしか常王殿の前にぬかすく村ろたる幾才の石段は
其首聖祖上人が九年の間朝に冥相の真理を談し夕に安

史讀誦まじく、面影を物語るかのやう。誠に宗祖上人は
一代慈悲の丁史を収めて切なる波木井公の請を入れこ
の周旋なる才短の山間に逃れて史餘の室中に専ら子弟
の收養に力められたのである。秋は妻戀ふ鹿の聲を聞き、
冬の朝に雪を眺められし草の廣川は実に此の庵である。
又峰に登りては巖を折りみ澤に下りては芥を摘み給ひ
しや。住ひも亦この庵である。我は秋の千草の中を院ろに
遺蹟を履みながら萬感交し胸に迫つて去るにしのひす
あゝけにも傳き雲土よと瞑目合掌すること。そゝしはら
く々わけて我水は銀星まはらな宵。瀾を元来し方へと是を
急つて汲送下つた。森の梢には鳥の聲が暮しけに聞え
てゐた。

小春日和

中一辻能學